みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

パリの日本人学校における文化背景の異なる生徒をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大森, 康宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004494

パリの日本人学校における文化背景の異なる生徒をめぐって

大　森　康　宏*

Interpersonal Problems Caused by Diverse Foreign Experiences among Pupils of the Japanese School in Paris

Yasuhiro OMORI

In the Japanese School in Paris, France, three groups of pupils, distinguished by their different overseas experience, are enrolled; (1) those who came to France directly from Japan; (2) those who were formerly enrolled in the French school system; and (3) pupils who had lived in another country after leaving Japan and before going to France.

This paper attempts to describe the main socio-cultural problems found among the three groups at the only Japanese school in Paris, as a consequence of their different overseas experiences.

The author conducted fieldwork in Paris for a period of 20 days in December–January, 1979–1980. Two principal research techniques were used to derive data. First, direct interviews were conducted with some 20 male and female elementary and middle level pupils, as well as with 4 pupils in a French school, and also with some teachers and parents of the pupils. Second, a movie record was made of the pupils interviewed (as well as of other pupils), both in class and at home, to obtain detailed data on the interpersonal peer-group relationships among the pupils. The film was later analysed to classify the problems encountered among three groups of pupils.

Research indicated that the principal interpersonal problems arose among pupils who had entered the school directly from Japan and those who had formerly been enrolled in a French school. The pupils enrolled in a French school are not able to

* 国立民族学博物館第3研究部

fit into the Japanese educational system, which means that they must study hard for the entrance examinations of the Japanese universities. Thus, the Japanese school plays a role in the re-education for re-entrance into Japanese society when the pupils return home from France.

Those pupils who had lived also in a third country (and were usually English-speaking) after leaving Japan and before entering the school in Paris, were either not involved or only peripherally involved in the interpersonal problems of the other two groups. Rather, this English-speaking group adopted a somewhat neutral and detached stance vis-à-vis their peers.

Research among the parents revealed two main types by aspiration; (1) imbuing their children with an international awareness; and (2) a principal concern with rigorously schooling their children to pass the Japanese university entrance examinations and for whom, therefore, developing a sense of internationalism was a relatively minor interest. But with just a few years of experience overseas, those children could not develop a good sense of internationalism.

Most parents interviewed would agree to sending their children to a French school were they to stay in Paris for short time, usually 3–5 years. Thus, given the parents' way of thinking, the development of a sense of internationalism would just be an illusion.

1. はじめに
2. パリにおける就学形態
2.1. 現地学校の場合
2.2. 国際学校の場合
2.3. 日本人学校の場合
3. パリの日本人学校
3.1. 日本人学校について
3.2. 生徒同士およびフランス人の評価
3.2.1. 日本から来た生徒
3.2.2. 現地学校から来た生徒
3.2.3. 他の国から来た生徒
3.3. 生徒，先生，両親
3.3.1. 生徒から見た先生
3.3.2. 先生から見た生徒
3.3.3. 生徒の両親から先生への期待
3.3.4. 先生から見た生徒の両親
3.3.5. 両親から見た生徒
3.6.6. フランス人教師から見た日本人教師
4. おわりに

1. はじめに

外務省領事部の調べでは，日本以外の国で教育を受けることを余儀なくされている6歳から15歳までの日本人生徒総数は約24,000人と言われている。祖父母やその他の親戚に預けられて日本の学校に就学している生徒を除いて，これら海外の日本人生徒は親の職業上の都合により，現地に居住している場合がほとんどである。

こうした海外の日本人生徒のなかで，フランスのパリに居住するものは，日本人学校，国際学校，現地学校（現地のフランス人学校）などのさまざまな教育施設で学んでいる。そして日本とは異なる文化・教育環境のなかで，生徒たちはさまざまな困難に直面している．幼少期にこうした外国文化から受ける文化ショックについては，すでに多くの報告がなされている（例えば，[河合・藤縄　1980: 102]）。また，外国から日本へ帰国した子供の日本への不適応状況，いわゆる復帰ショックなどについても多くが論じられてきた [稲村　1980: 137; 小林　1980: 83]。

本報告においては，外国文化の中で生活することから受ける直接的な文化ショックというよりもむしろ，日本人生徒が日々の生活をおくる学校，とくに日本人学校における集団生活のなかで間接的に受ける文化ショックについて報告しようとするものである。それは，日本人学校に通う生徒が，日常接しているフランス人から文化ショックを受けるだけでなく，文化背景を異にした日本人生徒によって構成される学校内においても，ある種の文化ショックが引き起こされること，および復帰ショックの一端がすでに現地の日本人学校に垣間見られるという2つの点で重要と考えられるからである。

すなわち，パリの日本人学校の小・中学生たちを例として，過去の通学経験のちがいによって，パリで初めて外国文化を体験しつつある生徒，あるいはすでに現地学校を体験して転入してきた生徒，また他の国から転入してきた生徒などに分類し，彼らの交友関係のなかで，それぞれの文化的背景あるいは教育的背景のちがいがどのような影響を及ぼしているかについて報告するつもりである。また，そうした生徒をとりまく先生，生徒の親などについても，同様の点から考察したい。

この報告は，1979年12月20日から1980年1月10日にかけて調査した事例にもとづいている。調査に際しては，日本人学校の生徒を主たるインフォーマントとした。他方，校長をはじめ日本人教師，フランス人教師，そして生徒の両親などにもインタビューをおこない，生徒をめぐる状況をより明確にしようと試みた。インタビューの際，その一部は映画フィルムとして収録しておき，それらを繰返し見ることによって，情報

の精度を上げることに努めた。調査日数の関係上，またその他，実際上の理由により全生徒にインタビューすることはできなかった。

日本人学校では，小学校2年生以上，中学生までの生徒，約20名に直接インタビューをおこなった。また，比較考察の必要上，現地学校に通学する生徒に関しても，4名にインタビューし，現地学校に通学させている親についても，5名にインタビューをおこなった。しかし，国際学校については，適当なインフォーマントを得られなかったので，過去に通学した経験のある生徒2名についてのみインタビューをおこなった。

なお，統計データーについては，日本人学校および外務省領事部移住課が作成したものなどを利用した。

2.　パリにおける就学形態

パリには，日本人学校，現地学校，国際学校の3種の学校が，日本人生徒を通学させる対象として存在している。それらの学校にはそれぞれ異なる特徴がある。

日本人学校については後の章でやや詳しく述べることにして，他の学校について簡単にその特徴を記しておく。

現地学校の授業は，すべてフランス語で行われる。しばしば異なる民族の子供たちが多く在籍している。教育は，教科書の通りではなく，各クラスの担任の教師に一任されている。授業中の教師の教育指導方法は絶対的な権威があり，なかにはスパルタ式教育を行なうような教師もいる。

日本のような受験勉強なるものはなく，宿題も日本人学校より少ない。夏休み中はより自由で束縛されない行動が出来るようになっている。生徒間の成績の格差は，当然のこととされ，優秀な生徒は学年を飛び越すことが出来る。どの学年も生徒の発想と個性をのばす点が重要視されている。校庭，スポーツ用グランド，図書室などの施設をはじめ，一般に教育環境は日本人学校よりもよく整っている。

一方，国際学校としては，さまざまのものが考えられるが，ここでいう国際学校は，英語で授業が行なわれる学校をいう。勿論，英語以外の言語で授業が行なわれる国際学校も存在する。しかし，日本人の子弟をスペイン語やイタリア語，ドイツ語による国際学校に通わせることはほとんどない。それは，英語やフランス語に比べて，それ以外の言語は日本人にとって国際性がとぼしいと思われていることや，それらの学校の教育水準が低いと思われていることによるようである。

この英語による国際学校は，いかなる民族の子供でも通学出来る。授業の内容や質は，現地学校と際立った違いはないが，教育方針は，それぞれの本国の教育方針をそのまま取り入れている。イギリスの国際学校ならばイギリスの，アメリカならばアメリカの国内と同じ教育方針がとられている。

さて，パリに移住する日本人は，このような3種の学校のひとつを選んで子供を通学させているのだが，彼らがどのように考えて，その学校を選択しているかは興味深い問題である。とくに日本人学校へ通う生徒の親の考えと，他の学校へ通学させる生徒の親の考えを比較することによって，日本人の海外における教育に対する考え方が多少は明確にされるはずである。また，後述するように日本人学校に通う生徒のなかには，現地学校や国際学校から転校してきた生徒たちも含まれており，その親たちの考え方を知ることは，日本人学校をめぐる問題を検討する際の基礎的な課題のひとつと考えられる。次に，現地学校を選択する場合を中心として，その問題を具体的な例によって考えることにする。ここで述べる短期，中期，長期滞在者とは，それぞれ3年から5年，5年から10年，10年以上の滞在者を意味する。

2.1.　現地学校の場合

(a)　日本の小学校から現地学校へ転校した生徒

これらの生徒の親は，3年から5年の滞在が予定されており，かつ帰国の時期がかなり明確である場合が多い。こうした短期の滞在者の場合，日本と異なる環境で子供を教育させることは，子供の将来にとって有利になると考える親が多い。とくに，低学年の生徒の親の場合，国際的教養を身につけさせることができると考える一方で，日本の受験競争にも追いつかせることが出来る時間的余裕があると考えて現地学校を選んでいる。

また，男子ほど就学に真剣になる必要がなく，国際感覚を身につけ，教養高い女性として育つことを希望する女子生徒の親なども，現地学校を選択する。実は，こうした考え方を持つ親は，海外駐在員の60%以上にものぼっている [栗田・八村　1981: 37]。後に述べるように，近年になって現地学校への就学数が上昇しているのも，このあたりに理由があるのであろう。

このような現地学校選択は，日本人にとって海外の教育を受ける機会が少なく，稀少価値的な体験であると親が考えていることによる。そして，その背景には，短期間の海外教育であっても，成長した後に国際的な社会人となる可能性が高く，そうなることを願う親たちの期待があると考えられる。その期待がどの程度にかなえられるか

は不確かだが，その子が突然に現地校に転校させられた場合，子供にとって，たいへんな負担がかかってくることは確実である。

また，消極的な理由ではあるが，パリに住む日本人集団のなかで感情的なゆき違いや，いざこざに巻き込まれ，親同士の関係がまずくなり，その結果　子供の交友関係に亀裂が生じるなどの悪影響がでることを恐れて，帰国数カ月前まで子供を日本人学校に転校させない親もいる。

（b）フランスに長期間滞在し，幼稚園，小・中学校と一貫して現地学校に通園あるいは，通学する生徒たち

一般に，自由業や現地自家営業，実業家，現地企業サラリーマンなどの子供がこのカテゴリーに含まれる。この親たちは自己の意志でパリに住み現地社会で活躍しており，子供にもフランスの社会人となることを希望している場合が多い。したがって日本語による教育はほとんど考えていない。

また日本人学校が日本の企業，官公庁の駐在員の子供を優先的に入学させるという現実があり，転校の申し込みをしても入学の許可が得られないと考えて，子供を現地学校に通わせている親もいる。

次に現地学校通学の例をいくつかあげ，上に述べたことも含めてより具体的に選択の動機を検討してみる。

例1）　商業フォトグラファーをしている日本人夫婦で，2人の小学生兄弟の子供を持つ家庭の場合，幼稚園から一貫して現地学校に通わせており，両親とも子供と話しをする場合はフランス語を使用している。そしてごく簡単な表現のみ日本語を使用するという家族生活の方針を取っている。子供は日本を知っている程度でよいと考えている。

例2）　現地旅行斡旋会社に勤める日本人は，2人の息子を現地小学校と中学校に通学させている。しかし家庭内では日本語を用い，躾，行儀作法などはすべて日本式におこなっている。週に2回ほど日本語の補習をするため私設の塾へ通わせている。この家族の場合，家庭の外と内をうまく使いわけ，子供たちは日本人としてもある程度通用するように育てられている。

国際結婚の場合には，相手が日本にどのくらい共感を持つかによって事情がちがっているようである。

例3）　ある機械メーカーに勤めるフランス人の父親と，日本人の母親の場合に

は，子供の生活様式はすべてフランス式にしている。母親は一時的に日本に帰国したりするけれど，フランスに永住する希望を持っており，子供はフランス人として育てたいと考えている。

例4）　日本のある光学機器メーカーの現地会社に勤める日本人の父親とフランス人の母親の場合，その子供と両親との日常会話はフランス語，日本語の併用である。この子供は小学校低学年であり，父親としては日本語による教育に変えたいと希望しているが，母親がどうしても賛成しないためその希望は実現されないままである。

国際結婚して，しかも長期滞在者である親の子供のなかには，低学年の頃に一時日本人学校へ通学したが，現地学校に再転校したものもいる。それは，学校内で同級生などから，お前の親は「馬鹿なフランス人」というような嘲笑がたびたびその子供に繰り返され，結局は仲間はずれにされてしまい，現地学校に転校した例である。こうした子供の側からの訴えによる転校は，本人に対する直接の偏見ではなく，間接的な親に対する感情とそれにからむ無意識な連想によって生じる，いわば「多元規定的な」人種偏見［我妻・米山　1967: 243］と考えられる。

（c）　他の国からフランスに移住して，現地学校に通学している生徒

この生徒は他の国で多少はフランス語による教育を受けたものが多い。例を示せば次のような場合である。

例5）　父親が小規模な商社に勤める関係上，いろいろの国を点々と移動して来た家庭の子供は，単一文化のなかで教育されることがなく現地学校の教育による多重文化のなかで育ってきた。彼はカナダのモントリオールの小学校で英語，フランス語による教育を受けて来ているため，現地学校への適応は極めてスムーズであった。

上記の例の他に現地学校へ通学せざるを得ない場合が見いだされた。それは，他の国の日本人学校からフランスに移住してきた生徒で，パリの日本人学校に転校してきた例である。しかし，本人の性格上，日本人生徒との交友関係がうまくゆかず最終的に現地学校へ再び転校することとなった。この場合，パリ以前の日本人学校での教育がその子供のなかに，パリの日本人学校に適応し難いものを生じさせたのであろう。他の国の日本人学校から，フランスの日本人学校へ転校した場合にも問題が皆無というわけではないらしい。

2.2. 国際学校の場合

(a) 他の国の教育機関からフランスの英語で教育する国際学校へ転校した生徒

この場合，生徒の多くはすでに英語による教育を受けてきた子供である。英語教育からフランス語教育に急転換させることは困難と判断して国際学校へ転校させたのである。同時に，英語に絶対的な価値を置いている親が多く，フランス語は二次的なものと考えて国際学校を選択している。

(b) 他の国からフランスの現地学校へ転校し，さらに国際学校へ転校した生徒

この場合，生徒の親の多くは現地学校主義で，フランスではフランスの現地学校に通わせるのがよいと考えている。しかし，フランス語による授業は意外に子供には難しく，そのため再び英語で授業が行われている国際学校に転校させたのである。親は現地学校主義ではあるが，家庭では日本語を用い，多重言語生活に慣れさせようと考えている。

2.3. 日本人学校の場合

(a) 日本から直接日本人学校に転入学した生徒

これは海外に出た日本人の最も一般的な学校選択である。特に中学生の親は，子供を日本に残して来ない限り，子供を日本人学校に入れ，日本の進学教育を受けさせることを望んでいる。

日本人学校の1979年度の統計によれば，全校生徒262人のうち日本国内の小・中学校を経験したことのある生徒は176人いる。これらの多くの親たちは3年から5年の短期滞在者たちであり，この親たちは国際的な教養を身につけさせるよりも，帰国後の子供の教育を考えて日本人学校を選択している。

(b) 現地幼稚園を終了した後，または現地学校の途中から日本人学校へ転入学した生徒

この場合，就学年令に達しない子供をつれて赴任した親子は，日本人のための幼稚園がパリにはないので現地幼稚園に入園させることになる。そして子供が卒園の後，日本人学校へ入学させている。実際に，低学年のクラスの半数近くの生徒が現地幼稚園の卒園者であった。

現地学校からの転入の場合には，両親の帰国がひとつの引き金となっている。帰国

後，子供が日本の学校に慣れるように，現地学校から日本人学校へ子供を転校させる例が多くみられる。普通は，一年ほど前に子供を日本人学校に転校させる。しかし日本人学校在籍証明書を取得する目的のためだけに3カ月未満の在籍という極端な例もあるという。こうした傾向は高学年の生徒の場合に予想されることであり，現地学校および国際学校の両方から転校してくる。

親が子供を国際人に育てようと考えて現地学校に転入させたが，結果的には現地学校への不適応を起こして日本人学校へ入りなおす生徒もいる。一方，生徒自体は現地学校によく適応していて，教育上支障はないのだが，日本人学校へ子供を転校させた例もある。

例6）すでに長期間に渡ってフランスに滞在している画家の子供は，中学1年まで日本語による教育を受けることなく育った。そのため，一日の大半を現地学校で過ごす子供は，フランス語で考え，話し，しかも行動様式もフランス的になって来る。そして，親との間に対話や行動，思考方法，感情の表現などにおいて相違が生じ，家庭内コミュニケーションがスムーズにいかなくなって来た。しかも親の高齢化も手伝って，家庭内の両親の不安は増大する一方であった。とくに父親は絵画制作という仕事がらフランス語を話す必要もなく，子供との間に言語的ギャップも生じてきた。

そこで，子供に正確な日本語を習得させたいと希望すると同時に，行動，思考方法においても日本人として成長することを希望して，現地学校の中学2年に進級する予定を変更し，日本人学校の中学1年に編入させたのである。

国際結婚している両親の子供が高学年になると現地学校から日本人学校へ転校してくるケースがある。この場合，父親が日本人で日本企業に関係していることが多い。しかし母親の日本に対する共感度が低い場合には，子供も日本人学校へ通学させることはむずかしくなる。

（c）他の国からフランスの日本人学校へ転入する生徒

英語による教育を受けた子供は，現地学校または国際学校へ入学する場合が多いと考えられる。しかし，フランス語の習得が困難と考えたり，国際学校での英語による教育は，フランス文化にかこまれた環境の下では英語圏の生活文化の実体験が得られないと考えて，日本人学校を最終的に選択している例がある。

他の外国の日本人学校からそのままフランスの日本人学校へ生徒を転入させている場合は，日本から直接やって来て，日本人学校に入れている場合の延長線上にあると

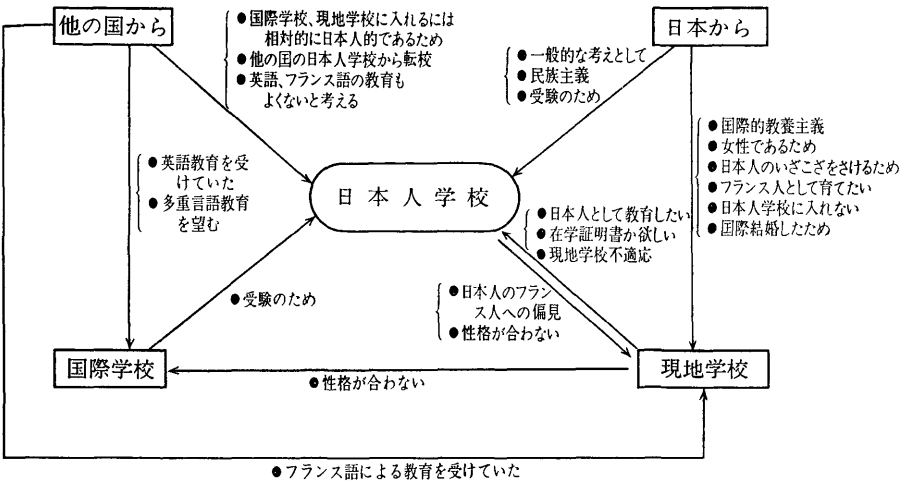


図1　日本人学校を中心とした就学形態とその背景

考えられる。その場合の動機は後者の場合と同様であり，広い意味の日本人社会への適応処置として子供を日本人学校に通学させているのである。

以上のようなパリにおける就学形態を図にしてみると図1のようになる。図1のなかには，パリの日本人学校，現地学校，国際学校などから日本，他の国への移動は含まれていない。

他の国から来る生徒の場合，それまで英語による教育を受けていたかどうかによって学校選択がなされるようである。生徒が英語をよく理解出来る場合には国際学校に転校することを考える。現地学校や日本人学校に通学させない背景には，往々にして英語至上主義がみとめられる。しかし，フランスへ移るまでは英語による教育をしたが，子供の性格上，外国人のなかに入れて勉強させるのはむずかしく，行動的にも日本人的である場合には日本人学校へ通学させる。こうした生徒は数の上では大変に少ない。

日本から移って来る生徒の親たちは大きく分けて，実際的な受験優先主義をとるか国際的教養優先主義をとるか，のいずれかに属している。これを滞在期間という点から見てみると，そこには時間的な余裕にからむ問題が含まれている。

短期の場合には，子供が低学年であれば国際的教養をつけさせることを優先して，現地学校へ通学させる。そして高学年ならば受験のことを考えて日本人学校を選択している。5年以上の中期滞在者は，子供がいずれ高学年に達するため，受験のことを考えて，はじめから日本人学校に通学させている場合が多い。

長期の滞在者の多くは日本に帰ることをほとんど考えておらず，現地学校に子供を

通学させている。しかし，なかには先の例にもあったように子供が日本人として育つことを希望して日本人学校へ転校させることもある。これは一種の民族主義であろう。これとは逆に，日本人学校から現地学校へ転校させられる生徒も出てくる。それは，国際結婚による場合であり，両親が子供をフランス人として育てようと決めた時に子供は現地学校へ転校させられるのである。これは民族主義に対して帰化主義と言えるであろう。

パリの日本人生徒の就学形態を考えると，受験のことや日本社会への復帰のことなど実際的な面を考えて日本人学校を選択している場合が多い。また最初は国際学校，現地学校などに通学させているが小学校の高学年，中学の段階で受験・進学などを考慮して日本人学校へ移ってくるものも少なくない。そのなかには，子供を日本人として育てるために日本人学校へ転校させている場合もある。

このように，パリ日本人学校は，日本からの生徒だけで構成されているのではない。他の国の学校や国際学校，現地学校などから転校して来る生徒も決して少なくない。そこには，日本での学校とはすでに異なった状況が存在するのである。

3.　パリの日本人学校

3.1.　日本人学校について

前章までの部分で日本人学校を選択する背景，諸条件についてふれるとともに，結果として日本人学校に現地学校経験者や国際学校経験者が在籍していることについて述べてきた。ここでは，異なる文化・教育背景を持つ生徒同士が日本人学校内外のところでどのように影響し合っているかを分析してみる。そのまえに日本人学校の概要について簡単に述べておきたい。

パリには世界の他の大都市と同じように日本人を対象とした小・中学校が1973年10月に設立・開校された。この日仏文化学院 (Institut Cultural Franco-Japonais) は私立学校法人の日本人学校であり，主としてパリ在住の日本国官公庁，企業の駐在員たちの子弟を勉学させる目的で設立されたものである。

教諭は，日本人学校の要請を受けて在外公館，外務省，文部省，都道府県などが募集し，選考の上，採用されている。[文部省学術国際局ユネスコ国際部　1977: 49]。教育の目的は現地日本人子女を対象として，初等・中等の普通教育を施すことにあり，公立学校的性格が強いものである。

しかし，この日仏文化学院の経営には，公務員，大企業の会社役員などが参加して

おり私立学校の経営形態をとっている。内訳を見ると，理事長，副理事長には大手の商事会社の現地社長が就任しており，理事，幹事は公務員，商事会社役員，銀行，報道，航空などの関係者，計19人によって構成されている。経営者は単に学校経営だけでなく，間接的には教育方針，その他生徒の転入学許可にも関与するともいわれている。

教諭は19名で構成されており，そのうち日本人教諭は15名，フランス人教諭は4名であった。日本人教諭は3年ごとに入替えが行なわれる。その他3名の事務員が学校事務にたずさわっている。

1979年5月当時の日本人学校生徒数は，263人（外務省領事部の統計では262人）で，各学年は1クラスからなるが，小学校4年生だけは生徒数が多く，2クラスの編成となっている。

外国における日本人学校という事情もあって，クラスの人数にはバラツキが見られる(表1)。全クラスの平均は26.3人であるが，小学校5年生の35人，中学校2年生の15人とでは倍以上の差がある。

クラス別の男女比率のバラツキはさらに大きい。全校の平均は，男子56%，女子44%の割合であるのに小学校5年生では，男子74%，女子26%となっている。逆に男子33%，女子67%という比率を示すのが中学2年生のクラスである。ただし，これらのクラス生徒数，男女比率は，親の職業上の移動が起こる春と秋に入れ替り，常に変動していることに注意しなければならない。

日本人学校の年間授業日数は202日ほどで，小・中学校の合計10クラスの週間授業時数平均は313時間で，1クラスの平均週間授業時数は31.3時間であり，日本とほぼ同じ時間数と思われる（表2）。しかし，カリキュラムの編成は，日本とは少し異なっている。

小学校では，日本の学校と違って，日本語の授業は週8時間という最大限の時間割りが組まれている。中学では，日本語は5時間に短縮され，代りに英語が週6時間割

表1　学級編制（5月1日現在）1979年

性別他＼小・中年	小学部 1	2	3	4	5	6	計	中学部 I	II	III	計	合計
男子	20	14	11	26	26	17	114	16	5	12	33	147
女子	9	16	17	22	9	12	85	16	10	5	31	116
計	29	30	28	48	35	29	199	32	15	17	64	263
学級数	1	1	1	2	1	1	7	1	1	1	3	10

パリ日本人学校要覧1979より

表2　年間授業日数

月	四	五	六	七	九	一〇	十一	十二	一	二	三	合計
日数	14	20	20	15	20	23	20	15	20	21	14	202

パリ日本人学校要覧1979より

表3　1週間の授業時数

	国	社	数	理	音	国I	体	家	仏語	道	特・活			合計
小1	8	1	4	2	2	2	3		2	0.5	0.5			25
2	8	2	4	2	1	2	3		3	0.5	0.5			26
3	8	3	5	3	1	2	3		3	1	1			30
4	8	3	6	3	1	2	3		3	1	1			31
5	8	4	6	4	1	2	3	1	3	1	1			34
6	8	4	6	4	1	2	3	1	3	1	1			34
	国	社	数	理	音	英	体	技・家	仏語	道	特・活	英		合計
中I	5	4	5	5	1	1	2	1	2	1	1	6(2)		34
II	5	5	5	4	1	1	2	1	2	1	1	6(2)		34
III	5	5	5	4	1	1	2	1	2	1	1	6(2)		34

パリ日本人学校要覧1979より　　（　）会話

りあてられている。フランス語は，小学校で週3時間，中学校では2時間にすぎない。英語と比べてフランス語の比重は低い（表3）。そのため，日本人学校のフランス語教育では，現地の生活文化と接触するための最低のコミュニケーションがどうにかできるというのが実状ではなかろうか。

さてここで日本人学校の生徒の動向について簡単にふれておく。まず外務省領事部移住課が発表したフランス日本人児童生徒数の変動の数値をもとに作成したグラフを見ると（図2），日本人学校の生徒数は年々増加していたが，1979年を境に減少している。

現地学校の生徒数は，外務省の資料ではフランス全土のものしか入手できず，パリだけを区別することはできない。し

表4　保護者の滞仏年数

年	滞仏年数							
	一年未満	1.1〜2.0	2.1〜3.0	3.1〜4.0	4.1〜5.0	5.1〜6.0	6.1〜7.0	7.1〜
小1	9	7	3	6	5	1		
2	7	8	3	3	4	5		
3	6	8	8	1	3	1	1	
4	8	14	9	8	3	2	1	1
5	9	7	3	5	3	4	1	3
6	9	6	6	4	1	1		2
中I	8	7	6	7	1	3		
II	4		3	3	3	1		
III	5	2	4	5	1			
計	65	59	45	42	24	18	3	6

パリ日本人学校要覧1979より

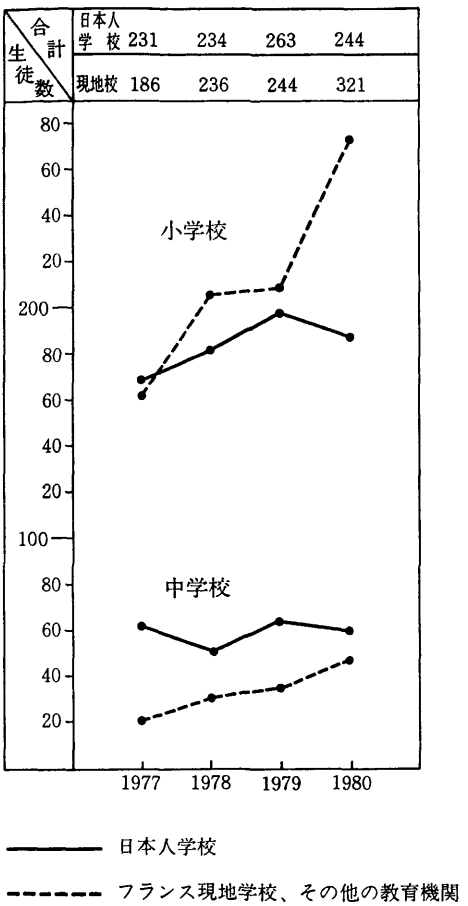


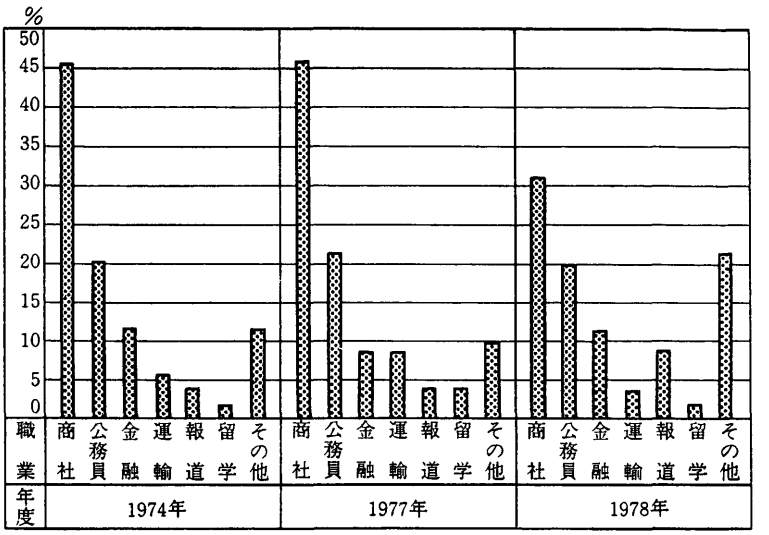
図2　フランス日本人児童生徒数の変動
〔外務省領事部移住課　1980〕

かし，日本人はパリ以外はさほど多くないと考えられるので，グラフの傾向はパリの状況を示したものと考えてよいであろう。この資料によれば，日本人学校の生徒数は減少しているのに対して，逆に現地学校の生徒数は増加の傾向を見せている。

生徒の在籍年数は一般に非常に短い。フランス滞在が4年未満の在籍生徒数が，1979年の統計では262名中，211名で80.5％を占めている（表4）。実際には毎年1/3以上の生徒の入替えがある。生徒に加えて日本人学校の教諭も3年ごとに数人ずつ入れ替るのである。

また1979年に日本人学校の調査した保護者の職業別の変動を見ると，1977年から1978年までの1年間に，それまで45％以上を占めていた商社員の生徒は15％減少している（図3）。反対に，その他が10％ほど増加し全体の20％以上を占めるようになっている。それは，現地長期滞在者の生徒の転入学が増加したことを示すものと思われる。そして，1979年の総生徒数262人のうち，86人（32.8％）の生徒が日本の初等，中等教育を経験していない。これらの生徒には日本の幼稚園を卒園した生徒もいるが，現地の小学校，あるいは他の外国から転入してきた生徒が大半である。

日本人学校生徒の量的変動と質的変動が1977年から1978年にかけて，何か今までとは違った要因によって起きていると考えられる。おそらく，実利的な受験優先主義から国際的教養優先主義への変換と，長期滞在者の日本人学校への転入学の増加が主な要因であろう。



パリ日本人学校「マロニエ」(1979年) より

図3　保　護　者　の　職　業

3.2.　生徒同士およびフランス人の評価

日本人学校の生徒は，文化的・教育的背景の異なる生徒たちから成っており，彼ら同士，互いにどのようにみているのか，また現地フランス人をどのようにみているのかをここでは事例によって示すことにする。それによって，生徒たちの育って来た文化的・教育的背景の違いがさまざまな形で影響し合っていることを，より直接的な形で提示したいと考えている。

3.2.1.　日本から来た生徒

この生徒たちは，日本の幼稚園を終了したか，小学校の中途から直接転入学したものたちである。転校に際しては，一見したところ，自分と同じ日本人であるため，ほとんど違和感を抱いていない。しかし，学校に慣れるに従って顔つきが同じでも，その行動様式・思考方法などの相違に気づきはじめる。

(a)　現地学校体験の生徒に対する意見

例7）　小学校2年生，男子，転校して8カ月

学校で一緒に遊ぶ友達でも，家へ帰るとつき合えない友達が出てくる。それは現地学校から来た友達で，家へ帰ると近所のフランス人とつき合う方が多くなるから

だ。僕らはフランス語が良く解らず仲間はずれになるんだ。日本から来て最初はみんなと遊んだけど，だんだん日本語しかしゃべれない友達だけと遊ぶようになった。そういう友達は少ないし，友達になってもすぐ別れたりするから大切にするんだ。家がわりかし近ければ，学年が違っても友達としてつき合うようになった。日本ではあまりそういうことはなかったけれど。

自由にフランス語ができない場合には，ほとんど日本語しかできない生徒同士の交友関係になる。つまり現地学校を体験している生徒とは学校内だけの友人関係になっている。しかも日本語しかしゃべらない生徒同士の友人関係は，生徒の激しい入れ替りのため，つかの間の交友であっても，より緊密な関係で結ばれ，さらに上・下級生間の交際へと発展している。とくに20人以下のクラスで，さらに男女の数的バランスもくずれている場合，こうした傾向が顕著になる。

例8）　小学校3年生，女子，転校して6カ月

日本から外国へ出るのは初めてだったので，日本人学校に入った時は少し怖かった。日本の友達よりも元気がよくて，話しかけるのが怖かった。それに新米で，フランス語は全然だめだったし，パリのことも知らなかったから，ずいぶんいじめられた。

低学年の生徒間では，新入りの転校生に対して，冷やかしや一寸した悪戯などをしてその反応を見て，その生徒の性格や性質を知ろうとする。これも，出入りの激しい日本人学校で自然発生したいわば儀式のようなものであり，その儀式を通じていくつか存在する仲間のどれかに属するようになる。

例9）　小学校5年生，男子，転校して1年半

日本人学校に日本から来て最初に感じたことは，自分勝手に自己主張をする者がいて，びっくりした。日本ではまあみんな先生の言う通りだけど，平気で無責任な行動をしたり，調子のいい奴が多いんだ。それも現地校から来たのが割りに多く，フランス人ともうまくやっているようだ。でも下校しちゃうと，フランス人とつき合うからそれでも，いいのかもしれない。

高学年の生徒は個性も出て，日本からの生徒と現地学校からの生徒の間に摩擦が生じる。現地学校からやって来た生徒は，自己主張が強く，自分で自分のことを決めるという態度をつらぬき，先生の指導があっても彼らは聞き流してしまう場合が多い。そのことに日本から来た生徒は驚くようである。また，日本から来た生徒にとっては，彼らは，相手の主張をうまくかわす話術にたけた調子のいい生徒であり，警戒を要す

る相手に見える。

(b)　他の国から来た生徒に対する意見

例10)　小学校5年生，男子，転校して1年

他の国から来た生徒を特に意識したことはない。人にもよるけれども，英語がよくできる者もいる。だけどフランス語は僕らのと同じぐらいだと思う。それじゃ，フランス人は相手にしてくれないから，僕らと同じようなものだと思う。

フランスの生活文化に慣れていない者同士という共通の意識が働いているようである。フランスでは英語を使用する機会が，大変に少ないので他の国からの生徒にそれほど隔りを感じてはいない。しかし英語を学び始めた中学生の場合には，他の国から来た生徒に対して，妬みが生じてくる。

また，日本人学校に転校して来る他の国からの生徒は，国際学校や現地学校へ行く生徒と比較して相対的により日本人的な情緒感覚を持っているように見うけられる。

(c)　現地のフランス人に対する意見

例11)　小学校2年生，女子，転校して2年

フランス人のお母さんを持たなくてよかった。道でお母さんが大声を出して子供を叱ったり，手で叩いたりしているのをよく見ます。それを見ていると，ものすごく怖くなってしまい眼をつぶってしまいます。日本のお母さんはあんなことはしないと思います。

それでもフランス人の子供はお行儀がわるいので不思議に思います。

日本の社会では一般に，大人は汚れているが，子供は純真無垢と考えられ大人になるまでは甘やかされて育つ。しかし西欧の子供の育て方は，子供には悪魔が宿っていて悪戯をすると考えられており，厳しく躾をすることによって一人前の理性のある大人に育つとされている。この厳しい躾の反動として，人の目の無いところでは，すさまじい悪戯をするのではなかろうか。

例12)　中学校1年生，女子，転校して2年

フランス人の子供の遊び方を見ていると，非常に幼稚だと思います。中学生になっても，小学校の3年生ぐらいのつもりで隠れん坊，おにごっこなどしたり，女の子ならお人形遊びに熱中するのはどうかと思います。私たちだったら，何か道具を上手に使ってゲームをしたり，スポーツをしたり　要するに頭を使った遊びを考え

ます。やっぱりフランス人の遊びは，ただ体を動かすスポーツであったり，単純な遊びを自分で見つけたりして一人で喜んでいるように思われます。

日本人のほとんどの子供は，フランス人の子供の遊びを幼稚だと思っている。それに対して，日本の子供は知識と器用さを要求する遊びでなければおもしろくないと考えている。この点でフランス人の子供を大変軽蔑している生徒も多く，その結果，彼らと親しい日本の子供を同様に蔑視することがある。

例13)　中学校2年生，男子，転校して2年

フランス人の子供は，相手が知人でもないのに気安く話しかけてくる。これには僕らついて行けない。だから自然に，こうしたフランス人を警戒するような気持になる。しかもよく言葉がわからないからだけど，同年輩にしては大人っぽい話し方をして初対面の人に話しかけてくるから気持が悪い時がある。パーティなんかの時にそういうことがある。

おそらく，その場限りでも，フランス人は相手を仲間にして遊ぼうと親切にしてくれるんだろうけど，少しやりすぎの感じがするんだ。

フランスでは，誰とでも会話をし交際する習慣が一般的であり，子供においても同様である。しかしこの接近方法は日本人生徒にとって不慣れでありどう対応してよいのか知らないものが多い。こうした場合には，日本人は周囲の仲間を意識して，たとえフランス人と話せても無口になることが多い。

3.2.2.　現地学校から来た生徒

フランス式教育に慣れた日本人生徒が日本人学校に転入学して最初に要請されることは，日本式の集団礼儀作法を心がけること，相手の立場を考えたものの言い方と行動を取ることなどがある。現地学校から転校したての生徒にとっては，そのことがさまざまな行動上のとまどい，心理的葛藤を起こさせるようである。

(a)　日本から直接来た生徒に対する意見

例14)　小学校4年生，女子，転校して6カ月

日本人学校の男子が女子に話しかける時の言葉がものすごく悪いのに驚いた。女のくせに男に口答えするなとか言って，男の子たちがみんなで文句を言うのもおかしい。意気地が無いからあんな言い方をするのだと思う。どうして男の子と同じ事をしたら生意気なのかわからない。また女の子も一人では男の子に向って文句を言

わない。それに，現地校から日本人学校に入った男の子も，言葉がすごく悪くなるのはおかしい。

男女平等の思想は存在するが現実には女性軽視が言葉の上でなされている。家庭内の会話を通じて学校にもちこまれる女性への侮蔑語は，高学年の生徒によって下級生にも広がって行く。

例15)　小学校5年生，男子，転校して3年

日本から来た生徒とよく問題になったのは，一寸したことを決めるのにも個人の判断で処理せず，みんなに聞いてからとか，集会を開いてからなどと言うことであった。小さな事を大きくしてまで決める必要は無いと思う。

それから，日本人学校ではやたらに集会が多すぎる。生徒会，学級会，クラス集会など，現地校では先生の話をする会のほかは自由参加だったし，それにみんなでやる掃除なんかの作業もなかった。日本人学校では何か無理して生徒が仲良くなるようにとか，協力するようにとか強制してるみたいだ。僕らみんな友達になれるわけがないんだ。

学校側のコンセンサス統一の方法に疑問を持っている生徒はかなり多い。日本人学校では教課以外のことについては日本よりも厳しさはゆるいのであるが，それでも現地学校から転入した生徒は勉強以外の干渉が多いと感じているようだ。

例16)　中学校1年生，女子，転校して2年

日本人の生徒は，フランス人の生徒よりも粘り強いが大胆な行動をしない。自己表現の態度もはっきりせず，勇気もなく，いじいじして明るく活発なところが少ない。友達同士のつき合いも，いつも相手に張り付いて行動するような様子が見られる。こういう友達関係というのは恋人とか，変な関係の人に限られていると思う。幼稚園の児童みたいに手をつないだりしておかしいと思う。こういうつき合いっていうのは，きっと相手に少しでも嫌われないようにするためにすることだと思う。そのくせみんな人の悪口を陰で言うからおかしくて，堂々としてないと思う。やっぱり正直に感情を出して，束縛のないつき合い方が一番いいと思うのだけれど。

堂々とした態度や活発さなどは，一般に現地学校の生徒に見られる。それは，集団行動のなかにさえ見られることである。しかし日本の生徒のなかにも大胆な行動を取るものもいるが，集団のなかではおとなしくなる傾向がある。友人関係について，現地学校から来た生徒は，各自の立場を明確にして人間関係を形成することが重要だと考えている。

例17)　中学校2年生，男子，転校して1年

日本人の生徒は言葉があまりよくできないので，ほとんどフランス人と話しをしないで日本人同士かたまってしまう。とくに現地校との交流の時なんか，パーティになるとまったく傍にも行こうとしない。言葉ができなくても，話しを聞こうと仲間に入ればいいと思う。それから日本から来た先生もフランス語ができないから，日本からの生徒と同様に現地校出身の僕らに頼る。フランス人との間にトラブルが起った時など，呼ばれて通訳させられるけれど一番損な立場に僕らはなる。フランス人はカッとなったら同じ日本人の通訳をしている僕らをどなりちらすし，日本人はフランス人を馬鹿扱いしているから平気な顔をしていて，間に入った者が一番いやな目に合う。

フランス語を一週間に3時間しか教えないのは実用を目的としない語学教育であるとフランス人教師は考えている。またフランス語ができない日本からの教師は，都合の悪い時に現地学校からの生徒を利用したりすることもあって，これらの生徒に頭があがらないということが起っている。

(b)　他の国から来た生徒に対する意見

例18)　中学校3年生，女子，転校して1年8カ月

英語圏から来た生徒は，自由で勝手な行動をするといって現地校からの生徒を批判するけど，少々お高くとまっていると思う。とくにアメリカにいたことのあるものなんか，フランスよりも生活程度が高いことを誇らしげに言うようだ。友達づき合いもあまりなく孤立する生徒がいる。おそらくフランス式の考えにも，日本人の考えにもついて行けないのかもしれない。前にアメリカから来た優秀な生徒がいたけど英語でよく本を読んだりしていた。

他の国から来た生徒はフランスと日本という極端に違う文化を背負った生徒たちの思考，行動には一歩しりぞいた態度を見せている。現時点では，フランス文化のなかの日本人の学校であることが彼らをそうさせるのであろう。また英語の重要性，世界的価値を知っている英語圏からの生徒は，フランスを軽視する傾向があり，それに反発しているのである。

(c)　現地のフランス人に対する意見

例19)　小学校4年生，女子，転校して3年

フランス人は子供にものすごく厳しい。親が友人を呼んで食事をする時など，絶

対に大人の仲間入りをさせてはくれない。カード遊びなども子供は中に入れないから，子供だけ別な場所に集まって遊ぶ。日本ではこんなに厳しく区別しないと思う。それからメトロの中でも一寸大きな声で話しをすると，大人に注意される。

西欧社会の一般通念では，大人の世界に子供を立ち入らせない。しかし同時に，子供には自由を認めて子供の世界を作らせる。また細かく干渉しないのが子供の躾け方の一つとされる。

例20)　中学校2年生，男子，転校して1年半

フランス人とは確実な約束というものはできない。現地校に行っていた時も約束のことで何回かフランス人と口論したことがある。フランス人が言うには，自分がまずあってその上で約束は守れるって言う。だから自分を犠牲にしてまで約束を守ることはできないと言われた。だからフランス人が約束を破った時の理屈のつけかたが上手で，最後まで自己の過ちを認めようとはしない。

子供たちの間でスポーツなどする時もかならず規則違反を起こすのはフランス人側がやる。

一般にフランス人社会全般について，約束，規則などに絶対的な信用をおくのは危険であるという考えが日本人には強い。しかし善良なフランス人からすれば，こうした考えは日本人のステレオタイプな見解であると反発する。しかし，フランス人と長くつき合って来た日本人生徒でも，フランス人の身勝手さに振りまわされることがある。

3.2.3.　他の国から来た生徒

数のうえでは，日本人学校生徒のなかで少ない方に属している。フランス語に限ってみれば，日本から直接に来た生徒と同じ条件下にあるが，すでに日本語以外の言語を多少とも学んで来ているので横文字には慣れている。さらにこれらの生徒の思考方法・行動などは日本から来た生徒よりも西欧型のものが多い。

(a)　日本から直接来た生徒に対する意見

例21)　中学校2年生，男子，転校して4年

ここの日本人学校へ来るまで，あちこち転校を繰り返して来たが，今になって考えると日本人だからといって日本的でなければならないという理由はないと思う。移った先で，その社会の習慣に慣れてこなければならなかったから，他人の事をあまり意識しない。日本から来た生徒が外国人に対して緊張して接する様子を見ると

おかしい気がする。外国人をすごく意識していて，その時の日本人の様子はまったく堂々としておらず，そばにいると恥ずかしいくらいだ。

異なる文化，社会の生活体験を持つ生徒は，多くの文化ショックを受け，それを乗り越えて来た。そして，フランス社会への適応もスムーズにいっているようであり，この生徒たちは外国人も日本人も言語の相違以外はそう大幅に変った人間とは考えていない。逆に，どんな文化にも適応する彼らの自己のアイデンティティーは，不明瞭になっているようである。

(b)　現地学校から来た生徒に対する意見

例22)　小学校5年生，男子，転校して1年

フランス語は感覚として理解できるが，英語のようにはいかない。現地校から来た生徒とつき合うと，フランス人と現地語を喋らなくちゃならない。調子のよいフランス人のあげ足とり的な言い方が気にいらない。

また，日本から来た生徒と現地校から来た生徒が何か考え方の違いで，議論になったりした時には，なんとなく一方の仲間に入りにくい。それは日本のこともよく知らないし，かと言ってフランスのこともよく知らないからなあ。

他の国から来た生徒は，ある場面ではのけものになり，ある場面では日本から来た生徒と現地学校から来た生徒の両方の交友関係を持つことができる立場にある。すなわち，現地学校からの生徒と，日本からの生徒が口論した場合などは，喧嘩のなかには入れないが，仲介者の役割りをはたすことはある。

(c)　現地のフランス人に対する意見

例23)　小学校5年生，男子，転校して1年

フランス人は古いものを大切にするけれど，便利な生活は嫌いのようだ。テープレコーダー，テレビ，電話なんかもすごく遅れている。両親からもよく聞くけど，新しいものを生活に取り入れることもしないし，生活も質素だと思います。アメリカや日本と比べて楽しい生活はあんまり無いようだ。

フランス人の保守的な生活態度は，子供たちにとっては遅れた文明と見なされている。発展途上国から来たものには生活程度のよさが目につき，機械文明国から移った生徒にはフランスは古くさいと思われるようである。

3.3.　生徒，先生，両親

日本人学校には宿命ともいえる問題が存在している。それは親の転任，その他の移動にしたがって生徒にも転出入学が生じることである。したがって生徒は常に変動の激しい教育環境にあり，先に述べた3つの異なる文化的背景をもった生徒間の確執や摩擦が時間的に緩和される余裕がない。一方，学校に赴任する先生も，慣れない環境のもとでの教育と現地への適応という問題を同時に抱え，それらを解決せねばならない。こうした条件のなかで先生，親，そして生徒の三者が互いにどのように相手の立場を見ているのかという問題をここではとりあげることにする。これまで主として同一次元の生徒間の人間関係を扱ってきたが，ここでは，それら生徒をとりまく次元のちがう人間関係に若干の照明を当てたいと考えている。

3.3.1.　生徒から見た先生

(a)　日本から直接来た生徒

例23)　日本の学校のように詰め込み主義でない勉強方法が気に入っているが，素行と学力を結びつけて批評してほしくない。いつも学力優秀な生徒が非常に“良い子”とは限らないのだから。

教師の考える教育理念への批判であるが，日本の教育のあり方にも関係している。

(b)　現地学校から来た生徒

例24)　先生のことは教育者として尊敬しているけれども，教室の外では日本から来た田舎のおじさんという感じがする。フランス語が判らないからどうしようもない。しかも，なかには方言まる出しの人もいるから日本語もおかしい。でもフランスで日本の教育を受けるからしかたがないと思う。

赴任後の先生の現地適応は，言語，習慣，生活すべてにわたって困難がつきまとう。そのため逆に，現地適応型の教育からエスノセントリックな教育指導に走ることがあり，そのことが生徒の信頼を薄くしている。

例25)　現地校では教室の先生はすごく厳しかったけれど，教室の外のことまでうるさくは言わなかった。日本人学校では，礼儀だとか，学校の規律など下校してからの行動までうるさくする。これは学校がパリにあるから，学校の名前を汚さないように，生徒にうるさいのだと思う。

集団規律の厳しい日本式教育は，フランス人の眼には軍事教練の一つと思われがち

である。とくに毎日の朝礼に対して奇異の眼を向けているようだ。

(c)　他の国から来た生徒

例26)　長い間，外国のあちこちをまわって来たので，日本についての実状を知りたい。時々日本に帰国するが，親類まわりなどで現実の日本を見ていない。だから学校でもっと日本について映画などを利用して色々と教えてほしい。

日本から来た生徒のみを対象とした教育だけでは不充分なように感じられる。すなわち，他の国から来た生徒，現地学校から来た生徒の日本復帰のための積極的な教育を行う必要があるのではなかろうか。

3.3.2.　先生から見た生徒

(a)　日本から直接来た生徒

例27)　学校では自立心を育てるため生徒自身のことは生徒にまかせて問題解決するようにしている。しかし段違いに現地学校の生徒よりも自立心というか独立心に欠けており，事あるごとに人を頼りにする傾向がある。

例えば，生徒同士の喧嘩なども，現地学校，他の国の現地学校から来た生徒は思いきり精一杯にやる。日本からの生徒のなかには，やる気がなくすぐ大人を引き合いに出す。野外調査などの観察にしても自分で調べようとしない生徒が日本から来たものには多い。それも親が子供に手取り足取りして教えすぎるからだと思います。もう少し子供の自由にしてやらないといけません。

自由で，個人的なことへの干渉の少ない現地教育で育った子供との比較において，日本から来た生徒の欠点がきわだっている。むしろ，そのことは日本の学校教育に問題があることを想像させる。

例28)　日本から来た生徒の会話，行動を観察していると，親の職業上の地位，階級などが微妙に反映している。つまり，同じ企業，官公庁に勤める親の子供の寄せ集めがこの学校ですから，友達同士のつき合いのなかにも親の上・下関係が影響して，主従関係に似たものが出来あがるようです。また官公庁勤務の親の子供はどちらかというと企業に勤める親の子供を見下すような態度があるようです。これでは自立心のあるのびのびした子供を育てようとする教育を阻害することになる。

父親の家庭内での職場に関する会話が生徒を通じて，学校内に持ち込まれる結果と考えてよいであろう。しかも生徒数の少ない日本人学校では，こうした親の身分階層が端的に生徒間の人間関係に反映していくことは，ほとんど不可避なのである。

(b)　現地学校から来た生徒について

例29)　日本から来た生徒よりも，現地学校から来た生徒は精神的，肉体的に自己防衛のための手段を身につけている。自己主張の巧みさもその一つだと思う。学校内で起った事件についての説明なども上手にするようだ。弁解などする時，生徒自身のした悪戯行為と自分自身とは別のものであると説明するのには驚かされる。

一般に西欧社会では素直に過ちを認めて謝ることは少ないとされる。現地学校から来た生徒も，一方的に悪いから謝るということはせず，プロセスにおけるさまざまな条件が重複して悪い結果を生じたと考えるようである。そのため弁解は常に必要であると考えているものが多い。

(c)　他の国から来た生徒について

例30)　他の国からの生徒は，日本の事情も，フランスの事情も知らないので学校内部ではわりにおとなしい存在のように思われる。それだけ頑張り屋もいる。現地学校から来た生徒にも共通する一つの傾向として，そのハンディにもかかわらず彼らの日本語の表現は非常に正確なように思われる。たとえ表面では日本批判をしていても日本人という事実を否定できないことを，よく認識していて日本人たらんと努力していることの現れであろう。

各国を転々と移動して，フランスの日本人学校に来た生徒は真に日本人としての自己を確立しようと努力しているように思われる。しかし友人関係に関しては，つかの間の友人関係から互いに理解し合える本当の友人関係を持つことは，日本から来た生徒と比べてむずかしい状態におかれている。

3.3.3.　生徒の両親から先生への期待

(a)　現地学校から来た生徒の両親

例31)　10年以上フランスにいます。最初は子供を現地学校に入れました。しかし，成長してゆくにつれて，一人前の日本人に育ってゆかないのが気になり始めました。それで中学生になってから日本人学校へ転校させたのです。日本人として子供を育てるために日本の教育を身につけさせたいと切望しています。勉強だけを中心とするよりは，日本人としての教育に力を入れてほしい。

長期滞在者にとっての日本式教育の内容とは，躾，集団の規律などの重視であって，そのことが担任の先生に切実に求められているようにみえる。ここには短期滞在者の場合とはおそらく異なった形の期待が日本人学校に託されている。

(b)　日本から直接来た生徒，他の国から来た生徒の両親

例32)　現在の日本の社会では進学のための受験は避けられないのが実状ですから，日本人学校の先生たちは受験のことを考えて教育してくれているのか少々心配です。あの学校はあまりにのびのびしているように思われます。それに先生がたは日本のあちこちの地方都市から赴任して来られていますので，教育方針の点で統一がとれていないのではないかと思います。大都市の受験態勢と地方都市のそれとでは緊張の度合が違いますからね。

全国から選ばれた優秀な先生が赴任して来るのであるから，日本人学校はある意味で，日本の公立学校よりは恵まれた教育環境にあるともいえる。受験に関して，親たちは学校教育以上のことを要求しているように思われるのだが，そのような要求が，地方出身の先生に対する不満という形で集約されているようである。

3.3.4.　先生から見た生徒の両親

例33)　日本人の親は教育に関する事はすべて教師に依存しがちであるが，親としての生活態度を反省したうえで，生徒の国際性とか，独立心を主張してもらいたい。

具体的に相談にくる生徒の親にはこれが一人前の大人の考えることかと考えさせられることがある。たとえば，進学のための成績の手なおし，日本へ帰って住む都市あるいは地域の選択，その他，数多くの相談を受ける。こうした親に限って日本人学校の教育を現実的，打算的に考え，日本へ帰国した後の進学，転校のための一時的な学校と考えている。

生徒の親には日本人学校に，生徒の国際性を養うことと受験勉強の両方を望む者が多い。しかし，じっさいには生徒の親自身がフランス人とつき合うことも少なく，どちらかといえば非国際的であり，他方，先生もすでに述べたように国際性を養う教育を生徒たちに行うことはむずかしい状況にある。したがって日本人学校にそうした教育を望むことはできない相談ではなかろうか。本当に子供の国際性を養うことを望む親たちは子供を現地校に通わせているように思われる。日本人学校における“国際性”教育は，ほんのつけたしのようなものにすぎない。

例34)　パリという場所柄もあって，生徒の父親にはエリートの公務員，大企業の駐在員などが多く，両親ともエリート意識が強い。極端にそのような意識が強い場合には，学校教育そのものを信頼せず，教師を軽蔑したり，学校の教育方針にも

非協力的であることが多い。そのために生徒全体の統一を乱すことがある。たとえば，子供に突然休暇を取らせて外国旅行に一家揃って行ってしまい，予定された学校・学級行事に支障をきたすこともある。このような親は学校側のことは何も考えていない。

生徒の家庭では，日曜日，祭日などに親の都合に合わせて子供を観光につれて行くことが多い。とくに駐在期間の終りに近づいた親は，学校の行事にかかわりなく子供をつれだす。しかし，親の側にすれば，課外教育の一端ぐらいに考えているようだ。

3.3.5.　両親から見た生徒

例35)　パリの日本人社会では生徒を紹介するのに親の職業・役職名などの肩書きをつけて互いにあいさつするのが普通です。だから生徒同士，親の身分を気にしないでは生活できないわけで，とってもかわいそうに思えます。しかしパリは，日本に住んでいる時のように氏名だけではことが済まない狭い社会なのです。親は子供の交友関係の相手の親の職業・地位をしっかり知っておくことが日本人社会では必要で，職業・地位のはっきりしない人たちと一応区別しておかなければなりません。

海外の駐在員によって構成される小さな日本人社会では，防御的な措置として相手の身元を常に確認しておくことが必要である。子供の親たちは，こうしたことが海外の日本人社会の階層性を育て，子供の交友関係を阻害することを知りつつも，それを止めることが出来ない現実を認めている。しかし，それが子供に差別する心を育てていることに気がついてはいないようである。

例36)　日本人学校の生徒の多くは，現地語ができず，したがって，つまりは日本語世界の延長線上で生活しているにすぎません。子供たち各自も，異国のなかの一人の日本人としてそれぞれの時間を消化しているわけです。フランス文化との接触などということも，所詮，末端のことにすぎません。だから日本人の友人を大切にしてもらいたいと思っています。

この例は，日本人の閉鎖性を示す典型的なものであろう。そのような閉鎖社会のなかでは，階層性が子供のなかに持ち込まれる一方で，ステイタスの高い人々との交際関係を誇りとし，かつ子供の将来にとっても有益であると考えているように思われる。

しかし，生徒の転出入に伴う変動が激しい日本人学校では，そのような友人関係を持続することは非常に困難なのではなかろうか。

3.3.6.　フランス人教師から見た日本人教師

例37)　日本から赴任して来た先生が学校の方針に従って，生徒を国際人にしよ

うとしている努力は認めよう。しかし教える先生自身がフランス語を十分に理解できずに，相手の文化を理解して教育するのは不可能に近いことである。言葉だけでなく，中年以上の教師にとって初めての海外生活は文化ショックも大きく，フランス社会に適応するのに精一杯の状態であるから，文化比較などを考える余裕は無いと思われる。

日本人学校で，生徒を国際人に育てることを重視するのならば，フランス語のできる教師あるいは，赴任前にフランス語の教育を受けた教師が派遣されるべきなのであろう。そして，経験は浅くとも若い教師の方が，そのような見地からはより適当であるように思われる。

4. おわりに

海外に家族を同伴して勤務する日本人が増加しつつある最近の情況からみて，日本人学校の存在が重要性を増していることは論をまたないであろう。とくに，企業の至上命令によって，世界中のいかなる任地にでも赴かねばならない海外駐在員の場合には，子弟の教育は頭の痛い問題であり，赴任にあたって，任地に子弟を教育できる日本人学校が存在するかどうかは，最大の関心事のひとつである。本稿では，そのような日本人学校の一つに焦点を当てて，海外（ここではパリ）に在住する日本人の子弟を教育する在外日本人学校というものが抱えている問題点を考えてみた。しかし，ここでは問題の解決を図ろうとするものではなく，むしろ問題の所在にできるだけ近づいて，観察し報告したいと考えたのである。また教育の場という特殊な環境を対象としたために教育論の問題に深入りしないように配慮したつもりである。以下これまでの観察結果をまとめて結びとしたい。

(1)　3つのグループから成る日本人学校

すでに述べてきたように，パリ日本人学校の生徒は3つのグループ，すなわち①日本から直接転入した生徒，②現地学校を経験して転入して来た生徒，③他の国の現地学校から転入して来た生徒，などから成り立っていた。①は日本国内で日本人だけの教育環境下に育った子供であり，②はフランスの教育環境で育った子供，そして③は主として英語圏の教育環境で育った子供である。パリの日本人学校は，いわば三様の文化的背景の下に育った子供から成る混成集団なのであった。したがって，一般的に受けとられがちな日本人学校のイメージとはちがって，ここには特有な心理的葛藤や

軋轢の派生する要因が胚胎しているのである。

外国の生活・文化・社会などに対する一般的な文化ショックについては，すでにいろいろな人々によって論じられているが（たとえば [星野　1980]），生徒同士が同じ日本人である在外日本人学校の内部において，類似の現象が認められることは，これまで看過されてきたようである。

上記の3グループは，同じ日本人でありながら，異なる文化の影響を受けた文化的には別個のグループであると考えることができる。したがって，そこにはある種の文化接触があり，また文化摩擦も起るのである。しかし，問題を複雑なものとしているのは，日本人学校という教育の場をめぐって起っている点にある。

(2)　日本人学校に寄せられる期待

日本人学校に期待を寄せる側は，生徒であり，その生徒の親である。そして期待を寄せられる側は先生である。それぞれの側の言い分はすでに述べた通りである。求められている期待の内容を見ると，一つは既述のように　Ⓐ文化摩擦の調停者の役割であり，もう一つは　Ⓑ国際化時代にふさわしい国際人教育であり，残る一つは　Ⓒ日本人ないし日本への復帰教育であった。

Ⓐの問題は主として先生の力量にかかわる問題であった。語学力の問題は別としても，短期間の契約で日本から招聘される先生に求める期待としては酷なようにも感じられる。しかも，ここでの文化摩擦自体，たえず新しく蒸し返される種類のものであって，決して時間とともに鎮静される種類のものではない。そして，調停者の役割を期待される先生自身が，日常生活においては文化摩擦の被害者なのであった。

Ⓑの問題は学校の教育方針にかかわる問題であると同時に，これもまた先生の力量にかかわる問題なのである。後者の場合を考えれば，たとえば，先生がフランス語ができない場合，そのことが原因で先生自身の異文化への不適応現象が起り，そのことが，ますます先生を日本人の枠に閉じこめるということが起りうる。そのような先生に生徒の国際人教育を望むことは，ほとんど絶望的な話であろう。

一方で，在外の日本人学校であるから，当然，子弟の国際人教育は可能であるという考え方は安易すぎる。たしかに学校の置かれている場所が異文化のただ中にあり，学校内部にも3つの文化的背景の異なったグループが存在し，生徒の生活環境も異文化の中におかれている。日本国内の学校に比べれば，生徒の国際感覚を養える機会と可能性には恵まれすぎるほど恵まれている。そして国際人教育は親の側の願望であり，学校側もその期待を反映して教育方針の一つに掲げている。しかし，可能性とその実

現は別の話である。

Ⓒの期待は日本ないし日本人への復帰教育であった。しかし，じつはこの期待には全く異なった二様の意味がこめられている。すなわち，対生徒という視点で考えれば，前記3つのグループの①のグループと②，③のグループでは意味内容がちがってくる。前者①のグループは日本から直接，パリ日本人学校へ転入したグループであり，後者の②と③のグループはどこかで在外現地学校もしくは国際学校の在学経験をもったグループであった。前者にとって在外日本人学校は，いわば日本国内の学校の延長線上にあり，日本への復帰教育ということは，日本本土へ復帰したとき，いかに障害なく連続的に日本の教育に復帰できるか，ということである。復帰したとき苛烈な受験戦争に負けるようでは困るのである。そのことは生徒自身，それほど深刻に受け止めていないとしても，生徒の親の側に，そのような期待が切実に存在しているとは首肯できる。

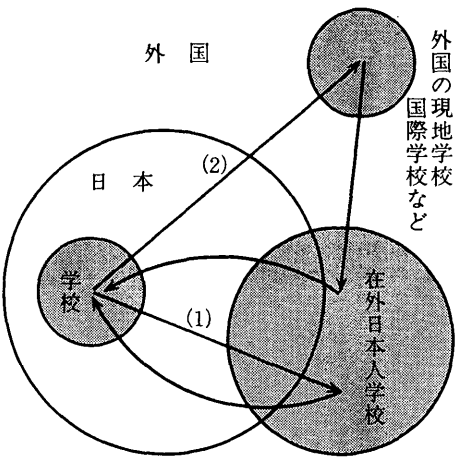
しかし，後者のグループにとっての日本への復帰教育とは，まず日本人への復帰教育ということになるであろう。なぜならば後者のグループが経験してきた現地学校における学校教育は，おそらく日本本土における教育に連続的につながるものとは思えないからである。この場合，日本人学校は，そのような不連続を埋めるものとしての役割を期待されていることになる。それは，先生に寄せられる期待のⒶで述べた文化摩擦の調停者としての役割と広義において一致するものである。しかしながら，ここでも親が寄せる期待の視点は二様に分れている。一つは10年以上といった長期滞在者の視点であり，一つは2，3年ないし数年以内の海外駐在員といった短期滞在者のそれである。報告のなかでもふれたように，前者が日本人学校に期待しているものは，何よりも子供が日本人としてのアイデンティティを回復し確立してくれることであった。他方，後者が期待するものは，おそらく，文化摩擦といった生徒の側，子供の側における不連続を一挙にとびこえて，日本本土の教育に直結させることだったのではないだろうか。それは，ある意味では前者，①のグループの親が寄せた期待と全く同じなのである。

(3)　日本人学校の抱える悩み

以上に述べてきた在パリ日本人学校に寄せられる期待に沿うために，先生が苦労していることは容易に想像できる。しかし，それらの学校に寄せられている期待を一瞥しただけで，それらの期待に答えることがいかに大変なことであり，パリ日本人学校の先生にいかに過重　負担を強いているか，ということが理解できる。しかも，先にあ

げた期待のうち，Ⓑと©はじつは原理的に相矛盾する期待なのである。なぜならば，国際人として教育してほしいという期待はいわば国際社会への順応を優先するものであり，日本への復帰教育を求める期待は，逆に日本社会への順応を優先するものだからである。

比喩的にいえば，在外日本人学校は，在外である限りにおいてすでに「日本の外」であり，日本人学校である限りにおいて依然として「日本の内」なのである。したがって，在外日本人学校は，「日本の外」を強調すれば「日本の外なる日本の内」となり，「日本の内」を強調すれば「日本の内なる日本の外」と考えることができる。それを図式化して示せば図4のようになる。この図において在外日本人学校を「日本の外なる日本の内」と考えたとき，国際人としての教育が成立し，「日本の内なる日本の外」と考えたとき，日本への復帰教育が主流を占めることになる。しかし，その双方を充足することは，ほとんど不可能に近いことかもしれない。そして，その双方を充足したいと願う親の期待が，先生の上と同様に生徒たちの上にも重くのしかかっている。



(1)：日本から直接、転入した生徒
(2)：現地学校及び国際学校から転入した生徒

図4　日本人生徒の異なる文化背景

以上，パリの日本人学校の事例によって在外日本人学校の抱える問題に焦点をあてて若干の考察を加えてきたが，この報告が決して問題を検討しつくしたとは考えていない。しかし，今日までマクロな形で論じられた青少年に関するアイデンティティ論や文化摩擦論などが多いなかで，ミクロな形で，このような小集団を取扱った例は数少ないと考えられる。また，ここでとりあげた事例は，ドイツのジュッセルドルフ，イギリスのロンドンなどにもおかれている他の在外日本人学校にも共通する問題を多く含んでいるはずである。この報告が，それらの問題を考える際の一つの資料となれば幸いであると考えている。

謝　　辞

本研究は，国立民族学博物館の共同研究班「海外における日本人の文化変容」の研究成果の一部である。また同時に，この研究に関しては，サントリー文化財団から，『日本文化の変容過程——異なる文化との遭遇——』の研究題目のもとに，研究助成をうけた。ここに感謝の意を表したい。

本報告の資料収集にあたっては，パリ在留の日本人の方々には大変お世話になった。厚くお礼申し上げたい。とくに当時のパリ日本人学校の校長，吉田博氏には一方ならぬご便宜をはかっていただいた。深く感謝している。しかし，残念なことながら吉田校長先生には昭和55年，ご帰国の後，急逝されて，今となっては感謝の気持をお伝えする術もなくなった。今はただ謹んで先生のご冥福を祈りたい。

次に，パリで映画による直接インタビューに快く応じて下さった方々にも心からのお礼を申し上げたい。その際の，撮影用機材その他の準備は，パリ・民族誌映画委員会（Musée de l'Homme 内）の協力によって実現されたものである。

最後に，インタビューに応じてくれたパリ在留の日本人生徒諸君にもここに記して感謝の意を表しておきたい。

なお，本稿の作成に当っては，本館の吉田集而助教授から詳細なコメントと直接のご指導を賜った。また，垂水稔助教授からは，懇切なコメントをいただいた。

文　　献

星野　命編
1980 『カルチャー・ショック』現代のエスプリ No. 161，至文堂。
稲村　博
1980 『日本人の海外不適応』（NHK ブックス）日本放送出版協会。
河合隼雄・藤縄真理子
1980 「在外日本人の適応・不適応についての臨床心理学的調査」星野　命編『カルチャー・ショック』現代のエスプリ No. 161，至文堂，pp. 102–119。
小林哲也
1980 「海外帰国子女の適応」星野　命編『カルチャー・ショック』現代のエスプリ No. 161，至文堂，pp. 83–101。
栗田靖之・八村廣三郎
1981 「海外駐在員の生活と意識調査報告」『国立民族学博物館研究報告』5(4)：pp.1–65。
文部省学術国際局ユネスコ国際部・国際教育文化課編
1977 『海外子女教育の現状』文部省。
パリ日本人学校編
1979a『マロニエ』パリ日本人学校。
1979b『日本人学校要覧』パリ日本人学校。
我妻　洋・米山俊直
1967 『偏見の構造』（NHK ブックス）日本放送出版協会。